

8月総評

西躰 かずよし

斎場

へ

影を蹴りつけ向かうとき  
ちきゅうはひかりまみれの樹海

さいう 石川県

斎場へ向かうことを拒んでいる訳ではないだろう。『蹴りつけ』、『ひかりまみれ』といった、やさしさのとなりに置かれるわずかな暴力性。『ちきゅうはひかりまみれの樹海』になるとき、そこは永遠の迷路に変わるものかもしれない。

花火は

骨

のまま還るから  
いなくなつて  
しまう

金光 舞 埼玉県

いなくなつてしまうのは骨のまま還るからなのだろうか。花火を美しいと思うのは、そこに滅びの運命を見るからだろうか。

大学生って感じの川の流れだね

カンゾーネ 北海道

大学生といえば、モラトリアムや子ども以上大人未満といったことばが思い浮かぶ。けれど、どれもしつくりこないのは、それが大人のことばに由来するからだろう。『大学生って感じの川の流れ』という一節がリアルなのは、大学生は大学生でしかないというあたり

まえのことが、そこにあるからだろう。

深夜

となりに人がいる  
だけで  
地球を愛せてしまう

うたた 岡山県

僕たちは、となりに人がいるだけで、ちきゅうを愛せてしまえる。ご飯を食べたり、あいさつを交わしたりするのと同じように。僕たちは、ちきゅうにくらべてあまりに小さくてはかないから、簡単でせつない愛が夜に浮かぶ。

夕立の上はぞくりと青い空

詩央えみる 大阪府

夕立のうえに広がる青い空。無時間性のなかの青。『ぞくり』とするのは、終わりのない何かをそこに見るからかもしれない。

残光を織り込んでいる服着つつ  
歩行者たちは火星の話

高遠みかみ 大阪府

語り手は少し離れたところにいる。だから歩行者の服にも、火星の話にもあまり関係がない。同じ作者の作品に、「雨の日に雨を見つめているという／あなたが素手であることの示唆」というのがあるけれども、同様の印象を受ける。素手であることが示唆されるのみで、それ以上の関係に発展することはない。あなたと語り手のあいだの関係の希薄さ。おそらく作者の関心は、そうした関係そのものにあるのだろう。そこに語り手の清潔な

孤独が浮かび上がる。

駅前のガストが無くてぼくたちの  
ガストの人も消えてしまった

ニイナ 海外

ガストは、日本中にあるファミリーレストランだけれども、語り手の言う『ぼくたちのガスト』は駅前のそれだけで。そこが無くなったら、そこにいた人もいなくなるのだろう。自身に固有のものが失われていくということは、さびしいけれど、いいことなのだろう。死のたびに、その世界が消えていくのだとしても。

おんなのこに  
花  
のつく名をつける親の  
剥がれそうなゆうやけのひたい

高祖 にたまご 岡山県

親の願い、不安、非力さ、それらすべての上でなされる名前をつけるという行為。『剥がれそうなゆうやけのひたい』という一節は、子につなぐ命のバトンが、一回性のものでしかないことを読者に伝える。

真夜中の高速道路を  
バスはクロールで進んでゆく

槇本 大将 兵庫県

バスに感じるシンパシー。真夜中の高速は、あたりまえのようにロマンチックで。でもそんな風にバスが夜を駆け抜けていくのを誰も知らない。

遠泳のひとりは今も太平洋

千坂希妙 大阪府

遠泳中に亡くなった人について詠んだものだろうか。帰れるものと、帰れないもののあ  
いだには、何一つ理由なんてなくて。

その時間は今も止まっている。